

チャイルド・ファンド・ジャパンだより

[スマイルズ] 2024年5月NO.56

SMILES

<https://www.childfund.or.jp>



ChildFund
Japan

チャイルド・ファンド・ジャパンは、1975年より、アジアを中心に貧困の中で暮らす子どもの健やかな成長、家族と地域の自立を目指した活動をしています。

特集

フィリピン・マニラ首都圏で
スポンサーシップ・プログラムを開始

都市スラムで生きる
子どもたちを支える

特集

フィリピン・マニラ首都圏で
スポンサーシップ・プログラムを開始

都市スラムで生きる 子どもたちを支える



支援事業部
石田 祐子

急速な発展を遂げるフィリピン。しかし、その影に隠れ、スラムという厳しい環境に暮らす人々がいます。

チャイルド・ファンド・ジャパンは、2024年よりマニラ近郊の都市スラムにおいて、スポンサーシップ・プログラムの支援を開始します。今回の特集では、支援現場を実際に訪問した支援事業部石田が、そこで暮らす子どもたちや家族の現状をお伝えします。



急速に発展を続ける フィリピンの首都マニラ

2023年夏、私はチャイルド・ファンド・ジャパンのフィリピン事務所から車に乗り、マニラ首都圏の都市スラムと呼ばれる地域へ向かいました。

途中通りかかった旧スモーキーマウンテン。かつてフィリピンの貧困の象徴とも言われた、巨大なゴミ山も、今は閉鎖されています。付近の橋を渡る時には、同行してくれたスタッフが「以前はこの橋桁の下にも、600世帯くらいの人々が暮らしていて、

バットマン（コウモリ人間）と呼ばれていたんですよ」と話します。車の窓からは高層ビルも見え、フィリピンがかつての最貧国から急速な経済発展を遂げ、大きく様変わりしてきていることが感じられました。

しかし、それは、フィリピンの見せるほんの一側面でしかありませんでした。



旧スモーキーマウンテンの頂上付近。
ゴミは散見されるもののかつてのゴミ山の面影はない。

発展の影に潜む 都市スラム

私たちが向かったマニラ近郊に広がる都市スラム地域は、地方から仕事を求めてやってきた人々などが密集して暮らす地域。多くの人々が漁業関連の仕事に携わっています。フィリピン政府はここから毎年百万人ずつのペースで公営住宅等へ再定住させることを計画しており、人々は立ち退きを迫られています。

車が目的地に到着し、バランガイ・キャプテン（自治体の首長）やバランガイ・ポリス（地元の自警団）とともに、人ひとりが通れるほどの狭い路地を入ると、そこには道中とは全く異なる光景が広がっていました。

水揚げされた小エビの加工場で、黙々と重労働する男性たち。それとは対照的に、鶏の鳴き声に囲まれて賭博をする男性たちの脇には、出来立てのチキンの総菜屋台が。また、おそらく貸出式と思われる棺桶のそばで嘆き悲しむ女性の隣で、鉄枠で保護された家庭用洗濯機によるコインランドリーが運営されていました。混沌としたその光景は、人生の縮図を見るかのようでした。



コイン式の洗濯機。
奥のお金を入れる部分は鉄柵で覆われている。

同行してくれた地元の女性が「洗濯機は、5ペソ（約14円）入ると5分間回せるのよ。」「こっちは、安全な飲み水を温めた『お湯の自動販売機』。」と、次々に教えてくれます。それを聞きながら、こんな考えが、ふと私の頭をよぎりました。「もしも私が、十代の頃にここで成長し、『この洗濯機を使って服をきれいにしたい』『温かい飲み物で癒されたい』と思ったとき、そのためのお金さえなかったとしたら…。生きるためのお金を得るために、私はどう行動するだろうか」と。

2階建ての住居に暮らす 6人家族の実態

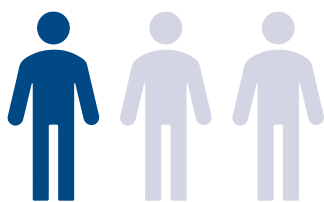
現地の協力団体に案内され、10才の男の子フィリップ（仮名）の家を訪れました。海岸からほど近くにある、トタンとベニヤ板を貼り合わせた2階建ての住居。フィリップは、マニラ都市部出身のお父さん、地元出身のお母さん、知的障がいのある叔母さんとその母、2才の弟といっしょに暮らしています。

「家族6人で2階建てなら、日本の家庭とさほど変わらないか。」一瞬そう思った私ですが、実態は異なりました。彼らは、この1つの住居を、1階の前方、後方、2階の3つに分け、3世帯で身を寄せ合って使っているのです。彼らの居住スペースは、4畳半ほどのベニヤ板を重ねた床面。一角の半畳ほどは板を張っておらず、そのくぼみに小型のプラスチックドラム缶を置き、濁った生活用水をためています。住居の内外に、トイレや水浴び場は見当たりません。

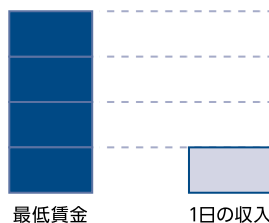
家族の生計をたてるのは両親。お父さんは、工場で梱包の仕事をしなが、ときどき漁業にも従事しています。お母さんは、子育てをしながら、魚を売って収入の足しにしているとのことでした。「生まれ育ったここを出て、再定住地域へ移りたいと思いますか」と尋ねると、顔を曇らせて「お金がないから、出られません」と答えました。



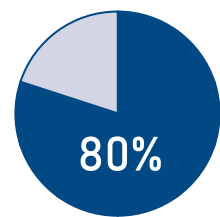
<数字で見るフィリピンの現状>



都市に暮らす人のうちおよそ
3人に1人がスラムで暮らしている
(出典：世界銀行)



都市スラムの一地域では、閑散期の1日の
収入が**150ペソ**で、最低賃金の**約1/4**
(出典：RILHUB)



子どもたちの**80%**が暴力を受けた
ことがあると回答
(出典：フィリピン児童福祉協議会、ユニセフ)

生きるために自らを犠牲にせざるを得ない子どもたち

住居の密集する道をどんどんと進んでいくと、船着き場に出ます。防波堤で囲われてはいるものの、乗り越える子どももおり、危険な場所です。通りには、賭博に興じる男性がたむろする中、「大人たちのこの姿を見て、子どもたちはどう育つだろうか」そんな不安もよぎります。実際、視察中には、同行した日本人スタッフの後ろポケットを男の子が物色することもありました。

私が出会った子どもたちは、幸い学校に通うことができていましたが、貧困ライン以下で暮らす家庭が多い中、「彼らにとって教育は贅沢品だ」と現地のスタッフはいいます。学校をやめ、働かざるを得ない子どもたちもいます。



子どもたちへの暴力や搾取の問題も非常に深刻です。現地のスタッフから、ある女の子の話を知りました。

この地域で生まれ育った18歳の女の子クリステル(仮名)。両親と4人の兄弟と一緒に暮らしています。海でカニをとって売ってお母さんの収入が一家の収入源ですが、日々借金の返済に追われ、売れなければその日食べるものを買うのも難しいといいます。兄弟で学校に行けているのは1人だけ。クリステルも8年生までしか学校に行けませんでした。

16歳のとき、クリステルは友達からある誘いを受けます。「この男性と会ってデートすれば、お金を稼ぐことができるよ。」

苦しい家計を助けたいという思いから、その話を受け入れたクリステル。「タクシーに乗ったのですが、ホテルに行くなんて知らなかったんです。その男性に『夕食を食べるだけにして』とお願いしましたが…」

事件のあと、怖くて外に出られなくなってしまったというクリステル。しばらくサポートセンターで暮らし、カウンセリングなどを受けたことで、家に戻ることができましたが、今も家族を助けるために働いています。



厳しい環境でも必死に生きる子どもたち

こうした厳しい現実には、私は苦しさを隠しきれませんでした。

しかし一方で、現地で生きる子どもたちの強さに、尊敬の念を抱くこともありました。

訪問した家で暮らすフィリップ。彼に「将来の夢は何？」と聞くと、「僕は軍人になりたい。フィリピンの国を守りたいんだ」との答えが返ってきました。クリステルは、「将来はしっかりと仕事について、家族が貧困から抜け出せるようにしたい」と話します。

子どもたち自身が困難な状況のまっただ中に置かれているのに、自分が強くなることで周りの人を守りたい、自分ががんばることで両親を助けたい、そう考えている彼らの姿勢に驚き、私は、心の中で彼らに敬意を表す思いでした。



都市スラムの 子どもたちを支える スポンサーシップ・プログラム

現地の視察を通して、私は子どもたちが多くの課題に直面していることを実感しました。家計が苦しく学校に通い続けることが難しい子どもたち、家や地域に水道やトイレなどが整っておらず、病気や感染症のリスクにさらされる子どもたち、暴力や搾取と隣りあわせの中で生きる子どもたち。私たちは、ミッションとして「子どもの権利を守る」ことを掲げていますが、そ

の権利が守られず、子どもたちが健全に成長できないのが実態です。

チャイルド・ファンド・ジャパンは、この都市スラム地域において、これまで、「みんなで守る 子どもの権利プロジェクト」を実施してきており、様々な課題の中でも、子どもへの暴力について取り組んできました。暴力をなくすための研修、地域への啓発や政策提言など、子どもたちのみならず、地域の人々の力を高める支援を行ってきました。

そして今年度、私たちチャイルド・ファンド・ジャパンは、この地域で昨年行った活動の経験や協力団体と築いた関係をもとに、包括的な子ども支援へと活動を拡大することを決めました。スポンサーシップ・プログラムとその他の支援を合わせ、子どもたちへ学用品などの支援を届けるとともに、学校施設の整備、教員研修などを通して、子どもたちが質の高い教育を受けることができますようにします。また、子どもの健康状態のチェック、安全な水が使える水道の整備などを通して、子どもの健やかな成長を支えるとともに、家庭や地域へも働きかけ、暴力や搾取からの子どもの保護にも力を入れる計画です。



昨年のプロジェクトでは、「沈黙を破ろう」と、パレードで子どもの権利を子どもたち自身が主張した。

一人ひとりの支援が 子どもたちの未来を変える

私が現地を視察して、もう一つ感じたことがあります。それは、「いま私がこの実態を直に見て、なんとかしたいといくら強く思っても、私一人の力では何もできない」ということです。

私たちチャイルド・ファンド・ジャパンは、これまで、多くの日本の皆さまの力を借りて、子どもたちへ支援を届けてきました。スポンサーシップ・プログラムを通して29,000人以上の子どもたちを支えることができたのは、他でもない、皆さまお一人おひとりの力なのです。

都市スラムの子どもたちを守るという、今回の私たちの新しい挑戦。これも、決して私たちだけでは達成できません。皆さまとともに、子どもたちを守っていきたいと思っています。どうか、皆さまのお力をお貸しください。

MESSAGE FROM PARTNER ORGANIZATION STAFF



Qrly.V.Gallano

現地協力団体SM-ZOTOで、理事長を務める。チャイルド・ファンド・ジャパンが実施した「みんなで守る子どもの権利プロジェクト」では、プロジェクト・コーディネーターとして、支援活動に従事した。

私の家族は、マニラの貧困地域トンドで暮らしていました。しかし、1986年、政府によるスラムの強制取り壊しの対象となり、移住を余儀なくされました。その後、私はSM-ZOTOのメンバーとなり、地域のユース・リーダーとして活動を始め、現在は理事長として3期目になります。これまで20年間にわたり、強い思いをもって活動に取り組んできました。

2023年度には、チャイルド・ファンド・ジャパンとパートナーシップを結び、都市スラムで暮らす子どもたちを暴力から守る活動を行うことができました。皆さまのご支援に深く感謝申し上げます。

貧困や暴力は、子どもたちにとって生涯にわたって大きな障壁となり、立ちほだかります。「子どもたちを守る」、私たちはこの使命を胸に、自分たちにできるすべてをやり切るまで、絶え間なく活動していくつもりです。

しかし、それは私たちだけでは実現できません。皆さまの支援があってはじめてできることなのです。これからも皆さまと一緒に、子どもたちを守っていきたく切に願っています。

外国にルーツをもつ子どもたちに安心して過ごせる居場所を！ 「学びのフレンドリースペース」を ご紹介します！



コーディネーター
澁谷さん 矢部さん

チャイルド・ファンド・ジャパンでは、昨年4月より、日本で暮らす外国にルーツをもつ子どもたちのための補習教室「学びのフレンドリースペース」の運営を行っています。今回は、運営を担ってくれているコーディネーターのお二人から、子どもたちの様子などを報告させていただきます。

外国にルーツをもつ子どもたちの教室「学びのフレンドリースペース」のコーディネーターを務めております、澁谷と矢部です。私たちは、この教室を略して「フレスペ」と呼んでいます。

フレスペは、毎週水曜日の夕方、杉並区にある教室で活動をしています。2024年3月現在、ネパール、フィリピン、エルサルバドル、中国につながる計5名の子どもたちが教室に参加しています。そして、ボランティアとしてフレスペに参加してくださっている8名のサポーターのみなさんと一緒に活動しています。

毎週の教室は子どもたちの元気な「こんにちは〜」の声からスタートします。教室に来ると子どもたちはすぐに学校の宿題に取り組みます。学校の宿題がない子どもは私たちが用意した日本語のプリントをすることもあります。子ども

たちの隣にはそれぞれサポーターが座ってお話をしながら楽しく学習を進めています。宿題が落ち着くと全員でBINGOなどのゲームをしたり、オリジナルかるたやカレンダーづくりをしたりします。サポーターと子どもたちはもちろん、子どもたち同士が楽しく交流できる場ができていないかと思いません。



福笑いを楽しみながら、顔の部位や上下左右などの日本語を練習



また、定期的にスペシャルな活動も企画してきました。昨年夏には夏祭り、12月には料理教室、今年3月には卒業・進級パーティーを行いました。

今回は料理教室についてご紹介したいと思います。料理教室では、子どもたちの保護者の方もお招きし、エルサルバ

ドル料理の「ププサ」を作りました。みなさんはププサを召しあ

がったことがありますか？ 実は、私たちのほとんどが、はじめてププサを食べました。エルサルバドルの子どもたちに、材料や作り方などを教えてもらいながら、協力して作ったププサはとても美味しかったです。ププサ以外にも、オルチャータというエルサルバドルのドリンクもいただきました。さらに、手巻き寿司の材料も用意して、楽しい時間を過ごせました。このように、フレスペでは日々の勉強だけでなく、子どもたち同士の文化交流や学び合いを大切にしています。子どもたちからも、「料理教室がいちばん楽しかった!」「ププサが美味しかった!」などの声があがりました。

「フレスペ」は単なる日本語教室とは少し違います。他の参加者やボランティアさんと楽しく交流することで、子どもたちの「居場所」になればいいなと思っています。これからも子どもたちが安心して楽しく過ごせる「フレスペ」にしていきたいと思っています。



ハロウィンイベントでは、折り紙でかぼちゃづくりをしました



ネパール

「子どもにやさしい学校づくりプロジェクト」

— 視察報告 —



支援事業部 栗原理恵

(ヒンドゥー教で祝福を表す赤い印「ティカ」を付けて)

2 024年3月、ネパールのゴルカ郡で行っている「子どもにやさしい学校づくりプロジェクト」の事業地を訪ねました。わたしは東京事務所で、このプロジェクトの調整役を務めています。日本NGO連携無償資金協力の助成と皆さまからのご支援で行うこのプロジェクトでは、耐震性の高い校舎の建設と、教育の質向上のための研修をおもに行っています。

私が視察に訪れた3月は、プロジェクトの2期目終盤。校舎がほぼ完成し、校庭や校門などの最終整備に入っているところでした。学校のニーズに耳を傾け、子どもたちが安全に、快適に過ごせるように、長い時間をかけ計画してきた校舎が、いよいよ完成に近づく様子を自分の目で確認できたことは、私にとって、とても感慨深いものでした。

安全な校舎の建設に加え、このプロジェクトで重点を置いて取り組んだのが、教育の質向上のための各種の研修です。ネパールでは「子どもにやさしい学校づくり」が政策として掲げられていて、子どもが安心・安全に、質の高い教育を受けられるよう、多くの細かな指針が設けられています。しかし、学校現場では、それらの指針を実行に移すための政府からの財政的な支援や、きちんとした教育を実践できる教員が不足している状況です。プロジェクトでは、子ども主体の参加型授業の研修を行ったり、保護者会で親の子どもの学習への関わりについて説明したりしてきました。一過的な支援で終わらないよう、「子どもにやさしい学校」の考え方や価値が、自治体、教員、学校運営委員会(教員、PTA、地域住民からなる組織)や保護者に、しっかりと伝わり、事業後も実践が続くよう心がけて実施しました。



建設中の校舎



地域のお母さんと話す様子

3 うしたプロジェクトの取り組みが、どのように地域の人たちに受け止められているのか——私は今回の視察で生の声を聞いて確かめたいと思いました。そして実際に子どもたちが住む村を訪ね、何人かのお母さん、お父さんに話を聞きに行きました。

一人のお母さんは、11人いるPTAメンバーの一人で、ひときわ学校の変化に真剣な眼差しを向けていました。「先生の教え方が変わり、学校は前より親の関わりをうながすようになった」、「親もより子どもに気を配るようになった」と話してくれました。また、同行してくれた学校運営委員長は、委員会とPTA、学校の3者で話し合い、役所や

個人からの支援金を集め、小さな基金を始めたこと、そしてその基金を預金して得られる利息を困窮家庭の子どもへの支援や、成績優秀な子どもへの賞品授与に活用する仕組みをつくったことを教えてくれました。

プロジェクトの働きかけが、「子どもにやさしい学校づくり」を支える地域の中に、よい変化をもたらしつつあることを知った喜びと、働きかけに応じてくださった地域の方々の「本気」を直に感じた瞬間でした。東京事務所に働く自分が、現地に得難い本気の協力パートナーを見つけたような思いがしました。自分たちの事業は決して一方通行の支援ではないこと、常に現地の人々と手を携えて行おうのだということを、あらためて実感できた貴重な視察となりました。

お知らせ

子ども・ユースと制作したグルーミングの啓発動画が完成しました!

SNSなどを通じた子どもたちへの暴力や搾取。警察庁によると、2023年、SNSをきっかけに性犯罪などの被害にあった小学生は過去最多となったといえます。

こうした中で、昨今問題となっているのが「グルーミング」。性的な目的のために、子どもたちに優しく接して信頼を得る行為のことです。チャイルド・ファンド・ジャパンは、昨年10月、グルーミングに対する注意を呼びかける動画制作プロジェクトをスタート。制作チームとして、中学生や大学生に参加してもらい、子ども・ユースの感覚や経験をふまえながらプロジェクトを進めています。

2月には動画が完成し、一般公開。Instagramのストーリーズに配信することで、多くの子どもたち、ユースに見てもらうことができました。動画から特設サイトにもアクセスできるようにし、グルーミングについての理解度チェックをしたり、相談窓口の連絡先を調べたりすることができるようにしています。



現在は、制作・公開した動画の成果を検証し、第2弾の動画制作を進めています。今回も子ども・ユースに参加してもらい、より効果的な動画づくりを目指しています。完成しましたら、皆さまもぜひご覧ください。

※このプロジェクトは、特定非営利活動法人日本NPOセンターの「安心安全なデジタル環境づくり助成プログラム」の助成を受けて実施しています。

第1弾の動画はこちら

<https://youtube.com/shorts/T-Rfiwpa-0k?feature=shared>



お知らせ

スリランカの子どもたち517人に自転車をお届けしました!



チャイルド・ファンド・ジャパンの支援地域の一つであるスリランカ。深刻な経済危機に陥ったことで、公共交通機関の料金が高騰するなどし、支援地域の子どもたちの教育に大きな影響を与えました。

チャイルド・ファンド・ジャパンは、在スリランカ日本大使館の協力のもと、日本の自治体から放置自転車などの中古自転車の提供を受け、517台を現地の子どもたちへ届けました。地域の中でも特に経済的に厳しく、学校への距離が遠い、12～16歳の子どもたちが選定されて自転車が配布されています。

4月1日には贈呈式も行い、現地の教育省大臣、在スリランカ日本大使館の大使も参加されました。支援地域から代表の子どもたちが招かれ、その場で自転車が手渡され、子どもたちはさっそく近くの道を楽しそうに自転車で走っていました。こうした支援も含め、チャイルド・ファンド・ジャパンは、スリランカの子どもたちが教育の機会を失うことのないよう、引き続き支援を行っていきます。

ChildFund Japan

Vision Mission

チャイルド・ファンド・ジャパンはここに掲げるビジョン(目標)、ミッション(使命)に基づいて活動します。

ビジョン(目標)

すべての子どもに開かれた未来を約束する国際社会の形成

ミッション(使命)

生かし生かされる国際協力を通じて子どもの権利を守る

チャイルド・ファンド・アライアンス

ChildFund Alliance

人種、宗教、性別、国籍を問わず世界の子どもたちに、効果的な支援活動をするためのネットワークで、子どもたちに向けたスポンサーシップ・プログラムを行う11団体から構成されています。チャイルド・ファンド・ジャパンは2005年4月に加盟しました。

スマイルズ
チャイルド・ファンド・ジャパンだより SMILES
特定非営利活動法人チャイルド・ファンド・ジャパン
〒167-0041 東京都杉並区善福寺2-17-5
理事長/高橋潤 事務局長/武田勝彦
TEL. 03-3399-8123 FAX. 03-3399-0730
E-mail: inquiry@childfund.or.jp
URL: https://www.childfund.or.jp/

2024年5月発行
(デザイン)
モスデザイン研究所
(印刷)
吉原印刷株式会社